

私見創見 Tuesday

東日本大震災、福島第一原子力発電所事故が起きてから5年がたった。被災地の復興はだいぶ進んだようであるがまだまだ不自由な暮らしをさ

れている方も多い。今後、10年、20年たてば、地震、津波の被害は確実に復興されるであろう。しかし、原発の復旧の兆しは全く見えない。被災

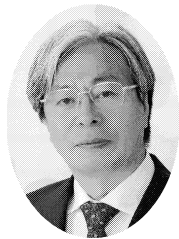
情報の公開と内容の説明

に4号機が水素爆発を起こし、放射性物質が漏れた。放射性物質は風によって運ばれ、SPEEDIの予測は？
SPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）は、原子力発電所

などから大量の放射性物質が放出されたり、そのおそれがあつたりという緊急事態に、周辺環境における放射性物質の放射線濃度および被ばく線量など環境への影響を、放出源情報、気象条件および地形

三浦 和彦

東京理科大学教授



みうら・かずひこ
1955年八戸市生まれ。東京理科大学大学院修士課程修了。土認定NPO法人富士山測候所を生活する1月事務局長。今年八戸特派大使。東京在住。

データを基に迅速に予測するシステムであり、まさに原発事故の影響を予測するために、気象庁が開発したシステムである。だが、事故直後はどれだけの量の放射性物質が放出されたかという情報が得られないとの理由で、予測結果は公表されなかった。確かに放出量がわからなければ、どれだけの影響があるかわからない。住民を混乱させパニックになるかもしれない。

18日、日本気象学会は理事長の勉強会を通じ反省を行い、名で全学会員にシミュレーション結果の公表を控えるよう連絡した。そして、SPEEDIの計算結果が公表されたのは3月23日だった。政府が飯館村など5市町村を「計画的避難区域」に指定したのは、事故から1カ月以上たった4月22日、北西部に線量の高い地点を確認した後だった。1カ月早く対策が施されていれば、被ばくせずにすんだと思われる人が大勢いるかと思うと残念でならない。予知できなかったマグニチュード9.0の大地震、予報を越える高さの津波、そして想定外の原発事故。科学者は自信を失っていた。もっとSPEEDIの予測結果の公開について議論すべきであった。その後、気象学会では多くの勉強会を通じ反省を行い、情報の公開の重要性と情報の内容を根気よく説明することの重要性を確認した。そして今回の反省に立ち、気象学・大気科学の立場から、平時より原子力関連施設の事故発生時に備えて最大限の科学的協力をする姿勢を明らかにし、政府および原子力防災専門機関に対し提言を行った。地震、火山噴火、原発事故に限らない。まず、住民に正しい情報を伝えることが重要である。それと同時にそれを理解する上で必要な知識も伝えなくてはならない。しかし、緊急時に新しい知識を得て冷静に行動することなどで、自然災害・人災に対する知識を得、対策を立て、訓練をしておく必要がある。その手助けをするのも科学者の責任である。

科学者の責任

された方々、避難生活をされている方々には心からお見舞いを申し上げます。5年前の3月11日、私は東京にある大学の17階建て校舎の8階の研究室にいた。これまでに経験した地震とは違う。校舎がゆっくりと大きく揺れ、天井からつるされた蛍光灯も天井にぶつからんばかりに揺れている。長周期振動である。震源地は三陸沖。「八戸は大丈夫だろうか。津波は。でも十勝沖地震、チリ地震津波の経験もあるから大丈夫だろうか」

しかし、その期待は裏切られた。テレビに映された映像を見てがくせんとした。そして、福島第一原発が停電となり、補助電源も機能しないと知った時、これは大変なことになると思った。翌12日1号機が、14日に3号機が、15日